

# チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人  
チェルノブイリ医療支援ネットワーク  
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F  
TEL/FAX: 092-260-3989  
E-mail: jimmu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.  
**133**

## 特集 大学生による福島訪問レポート

### CONTENTS

大学生による福島訪問レポート / リサイクル募金きしゃぼんのお礼とご紹介 / コラム ミンスクの1日 / チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶購入キャンペーンのご案内 / 2024年度通常総会のお知らせ / 支援者のお名前とメッセージ



長泥曲田公園

(飯館村：令和5年5月1日に特定復興再生拠点区域及び避難指示解除)

ホームページではカラー版を公開中

↓アクセスはこちらから



本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を支援して下さっている皆さまへお届けしています。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？  
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行	記号 17460 番号 52319621
	他の金融機関からは 七四八支店 (普) 5231962
楽天銀行	ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104
住信SBIネット銀行	法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416
※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」	

# ◇ 特集 ◇ 大学生による福島訪問レポート

2023年9月4日～9月9日の福島訪問に参加した3名の大学生のレポートです。  
訪問を通して知ったことや考えたこと、感じたことについて報告していただきました。

☆訪問した地域   
☆帰還困難区域 

## ☆長泥コミュニティセンター



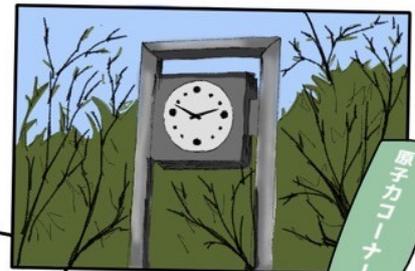
- 今年の5月開所
- 総工費は200億円超。
- 近くに除染土が積み上がっていた。

## ☆おれたちの伝承館



- 今年の7月開館。
- アート作品での原子力事故の伝承を目的とした伝承館。

## ☆旧・双葉町役場



- 時計が震災時の時間で止まっている。
- 倉庫には震災前にイベントで使われたものがある。原子力に関する展示物などもある。

- ココで被ばく測定を受けることができます。
- ピーク時は多くの方が訪れていましたが今はかなり少なくなっています。

## ☆放射線被ばく測定センター

☆出会った動物！



←ダルマ市で使われる大きなダルマが倉庫に置いてありました。



□内田 妃奈子（大学4年）

私は2021年、2022年に続き、3回目の福島訪問となりました。見聞きする中で、原発事故に対して福島に住む人たちの間にも温度差が生まれていることを実感しました。被災直後は目の前の生活を立て直すためにそろっていたはずの足並みも時が経つにつれていつの間にかバラバラになってしまっています。①原発事故を忘れよう、忘れさせようとする力と、②現実にはしっかりと目を向けて自分のできることからやっつけていこうとする力に大きく分かれて、ズレを抱える12年目の夏。今の混沌とした福島を報告したいと思います。

### ①原発事故を忘れよう、忘れさせようとする力

原発事故を忘れさせるために問題に目を向けさせないようにする、それすらも通り越えて無関心になっている人もいます。こうなってしまふのが分からないわけではありません。なぜなら、そうやって目を背けて忘れてしまった方が楽だからです。

↑ホールボディカウンター



◎ホールボディカウンター…体内の放射性物質の量を測定して内部被ばくの検査を行うための装置です。二本松市にあるホールボディカウンターの利用者は年々減って、現在ではスタッフががいる水曜と土日のみの稼働となっています。特に原発立地地域ではなかった中通りや会津地方の人は関心がなくなってきたようです。

◎放射線と生活習慣によるがんのリスク…飯舘村の伊藤延由（いとうのぶよし）さんが「飯舘村リスコミ誌の総集編（「監修」飯舘村支援 学際検討委員会）」を例にお話ししてくださいました。この誌面には内閣官房低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ報告書の内容が引用されており、『放射線と他の発がん要因等のリスクとを比較すると、例えば、喫煙

は1,000〜2,000ミリシーベルト、肥満は200〜500ミリシーベルト、野菜不足や受動喫煙は100〜200ミリシーベルトのリスクと同等とされています。』と書かれました。これに対して伊藤さんは生活習慣因子と被ばくを単純に比較してしまうのはおかしい、問題をすり替えてしまっているのはおかしい、おっしゃっていました。つまり、喫煙するかしないかは自分で選べるといったように自分で制御することが可能な生活習慣因子と、したくしてしたわけじゃない被ばくのリスクを並べること、問題に目を向けさせないようにしているのはおかしいんじゃないかということです。

このように、忘れよう、忘れさせようとする力がはたらいってしまっています。しかし、どん



飯舘村の伊藤延由  
（いとうのぶよし）さん

なに目を背けても、帰還困難区域の取り残されたままの風景、避難解除後もなかなか住民が戻らない場所、測定すれば出てくる原発由来の放射性物質など、どれもがなかったことにはしてくれません。

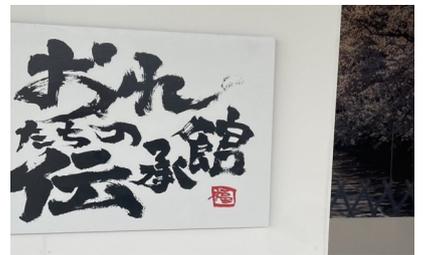
## ② 現実にしつかりと目を向けて自分のできごとからやっつけていこうとする力

①とは逆に、自分たちのできる範囲でできることをしよう、現実を記憶・記録しようとする奮闘している姿も目にしました。

◎**関心をもつ大学生の姿**…資料を閲覧するために訪れた、双葉郡富岡町にあるインフォメーションセンター「ふたばいんふお」では大学生たちがワークショップを開いていました。「双葉郡未来会議」のスタッフの方が学生に双葉地域の現状を伝えていました。漁業は出航して獲れる日が制限されていて事故以前のようにには戻っていないなど未だ抱える問題とともに、大きな松明を担いで駆け上がる麓山の火祭りや桜のトンネルとして知られる夜の森公園などの地域の魅力もお話しされていました。直接交流したわけではありませんが、時折質問したり意見を述べ



ふたばいんふお



おれたちの伝承館

たりして、現状を知ろう、学ぼうとする同年代の姿に刺激を受けました。

◎**原発事故の実像**…これは、前述の飯館村の伊藤さんがお話してくださるときに必ず出てくる言葉です。線量計がないと昨日も今日も変わらなないようにみえてしまいます。毒キノコは食べたらずぐ死に至りますが、放射性物質を含むキノコは食べても直ちに被害は出ません。目に見える分かりやすいリスクではないから、知識のない人はなぜ危ないのか分からず、危機感が薄まってしまうのだと思います。何もしなければ矮小化されてしまう事実には伊藤さんは向き合っている、測定することでデータとして事実を記録し続けています。

◎**おれたちの伝承館**…南相馬市小高区に今年7月

に開館した、原発事故の教訓を伝承する手作りの美術館です。「おれ」は地元の人たちが男女問わず使う一人称だそうです。中筋純（なかすじ・じゅん）さん、白髭幸雄（しらひげ・ゆきお）さんに案内していただきました。原発事故を象徴する風景で、ゲートのこちらと向こうでは世界が変わった、避難指示区域を仕切るバリケード。事故後に餓死させざるをえず骨と皮だけになってしまった牛と、牛が飢えをしのぐために最期にかじっていた柱の再現。チェルノブイリと福島のア甲状腺がん患者から集めた甲状腺ホルモン剤の薬の空シートでつくられたオブジェ。福島が歩んできた苦難の中でもなんとか頑張っ生きていこうとする上に向かっている力強いエネルギーを感じる天井画。経験や現実を切り取った絵画や写真。アートは文字よりもダイレクトに想いが伝わってくるように感じました。恐ろしさ、悔しさ、やるせなさ・・・そしてそれをみんなに伝えたい、忘れないでほしいという想いがひしひしと伝わってきました。言葉巧みに操られて都合の良いことだけをすり込まれるより、無駄な説明がなく、そのアートから自分で考えることができるような余白もあって、今までの訪問のことを見つめ直す時間

を過ごすことができました。

「忘れる」これは人間がもつ防衛本能の1つと言われています。嫌なこと、悲しいこと、苦しいこと、そういった経験のすべてを克明に記憶していたら、つまり忘れることができなかったら、すぐに不安やストレスで押し潰されてしまいます。ストレス社会といわれる現代で生きていくにはある程度の鈍感さは必要でしょう。しかし、すべてのことに見えないふり、気が付かないふり、さらには無関心になってしまうのは違うのではないのでしょうか。起きてしまった原発事故、向き合うべき過去や事実から目を背けて忘れ去った先にあるのは復興とは言えませんが。未来に、前に進むために現実に向き合おうとしている人たちのエネルギーがもつと広がっていくといいなと思います。私も鈍感力と敏感力のバランス感覚を大切にして、鈍感さの中にも情報を受け入れるアンテナは立てておきたいです。そして、間違った考え、楽な考えに流されず、自分の意思は忘れないように生きていきたいと思えました。

□平江 莉子（大学三年）

「本当に綺麗な海だなあ」。そう思いながら東北地方に降り立つ直前、広大な海と海岸を飛行機の窓から眺めていました。私にとって今回で2回目となる福島訪問は、あの広大な海とは裏腹に、遂に開始された原発処理水排出開始の事実に疑念を抱きながら始まりました。前回私が福島県を訪れたのはちょうど一年前の、2022年9月初頭でした。今回も、様々な場所を回る中で見えてきたのは、「保障されない安全」です。今回はこの「安全」というキーワードを念頭に置きながら、解除された特定復興再生拠点区域、表面上では進む復興、最後に飯館村の伊藤さんに伺ったお話を元に、「安全性」について書いていきたいと思えます。



撤去された長泥地区の  
ゲート跡と線量計

まず、訪問二日目に今年5月に特定復興再生拠点区域が解除された飯館村の長泥地区の、以前ゲートが設置されていた場所まで行きました。手元の線量計は最高値で0.847マイクロシーベルト/時を指していました。事故前の空間線量率は、0.05マイクロシーベルト/時（伊藤さん2023）。決して低いとは言えない数字を前に、撤去されたゲートの跡が残る道路を見ると、なんとも言えない感情になりました。解除されたとはいえ、被曝量は日本人の平均より上回ることです。にも関わらず、ゲートがなくなったことで人が立ち入れるようになってしまったなら、この間まであったゲートの存在はなんだったのでしょうか。

私たちはゲートが設置されていたより先へ足を進め、道中除染物が入った大量のフレコンバッグに遭遇しました。放射能汚染によるゴミ問題の解決が中々見えてこない現状がそのまま映し出されていたようでした。これらの除染物は中間貯蔵施設で一時保管されることになるが、2045年までに除染物を福島県外の最終処分場に搬出するよう「放射性物質汚染対処特措法」で定めています。環境省の敷地がある都道府県を目処に計画が進められており、現在も



撤去されたゲートの先に進んだ際見つけたフレコンバッグ

住民への説明が行われているようですが、理解や賛成を得られているとは到底思えません。それ以前に、放射能とは基本的に、“冷やす・閉じ込める”ことが鉄則のはずです。県外への搬出というよりは、放射能を全国にばら撒いていることに変わりありません。2014年時点で、賠償、除染、汚染水対策などでの国から東電への支援額は7兆円を突破しています。せっかく多額な費用をかけ、除染や搬出を進めたにも関わらず、県外へ運ばれてしまっただけで、資金を費やした意味がなくなるのでは無いでしょうか。フレコンバッグを後に、今度は避難指示解除とともに新設された「長泥コミュニティセンター」に立ち寄りました。すでに開所式も行われているとのことですが、立ち寄った当時は利用者がいなかったためか、かなりガラんとし



長泥コミュニティセンター



長泥曲田公園の張り紙

ていました。人をあまり見かけないこともあってか、山の中にあつた異様に新しい施設にどこか不気味さを感じました。さらに近くに長泥曲田公園もあつたのですが、公園内に貼られていた掲示物に、「人と自然がふれあう花の里、再び」というキャッチコピーを目にしました。住民の方を思えば、自分たちが過ごした思い出の場所が元に戻ることを望むのは当然です。しかし、公園内の草むらは本当に除染が終わっているのか、放射能が目に見えないからこそ、容易に触れられない自然とは私たちに何を恵んでくれるのでしょうか。このように、特定復興再生拠点区域が解除されたとはいってもそれは一部の話であり、復興拠点を中心に解除が進められているだけで、放射能は変わりません。本当に

住民の帰還を促すべきなのか。あのゲートの意味を私たちは考えなければならぬと思います。

こうした表面上進んでいる復興は長泥地区に限りません。昨年の8月末に特定復興再生拠点区域が解除された双葉町の中心部では、人気のなさは裏腹に、真新しい駅や市役所が目立っていました。加えて現在双葉町では居住者が約90人にも関わらず、市役所の職員はおよそ60人にもなるそうです。住民の数に対して、明らかに多すぎる職員の数。住民へのためというよりは、どうか人に人を増やすための措置では無いかと思ってしまうほど、不自然な人数だと感じました。この他、駅の近くにはこれまた新しい「双葉町えきにし住宅」という公営住宅が広がっていました。しかし、この住宅街付近で前回の訪問時にフレコンバッグが積み重なっていた記憶があります。そんなところに人が住んでいいものだろうか、ましてや子供を育てるなんて。そう疑問に思わざるを得ませんでした。さらに、今回の訪問で一番驚いたのがメガソーラーです。最終日の九月六日、私たちは伝承館の中筋さんの案内で、大量のメガソーラーパネルの元へ降り立ちました。目の前に広がる広大な土



中筋さんに案内された場所で見られた大量のソーラーパネル

地、というよりソーラーパネル畑には圧倒されました。学校の校庭何個分あるのだろうと考えられるほどのソーラーパネルがあたり一面に設置されていました。というのも、福島第一原発以降、原子力という電力の供給源を失った背景から、新たな供給源としてソーラーパネルが設置されています。しかし、中筋さんのお話を聞いていると、そこで作られた電気は東京に送られるとのこと。結局、福島への支援ではなく、出資企業の利益のために設置されたにすぎませんでした。加えて、後でメガソーラーについて調べると、現在福島県では大量のメガソーラー設置ラッシュにより、一部産地で「はげ山」化が進んでいるそうで、今年8月31日には「ノーモア メガソーラー宣言」が福島市から出されています。復興はおろか、環境破壊を招いては元も子ありません。ここでもまた、環境の

安全すら担保されていないと言えます。何をなして復興と呼べるのか、今一度支援側が一番考えなければならぬのでしょうか。

最後に、今回の訪問を通して見えてきた、保障されていない「安全性」について、飯館村の伊藤さんに伺ったお話を元に、書いていこうと思います。今回も様々な場所に赴いたわけですが、やはり解除されていても一部の特定復興再生拠点区域では未だ線量が高かったり、東京電力や国の杜撰な対応も見えてきました。とりわけ、最近では原発処理水の海洋放出が遂に開始されてしまったことは、福島県の方だけでなく、私たちや、日本以外の国にまで影響が出る恐れもあります。まずその原発処理水ですが、伊藤さんからも処理水ではなく、汚染水だとう発言がありました。この汚染水問題に伴って、マスメディアでは中国を中心に、他国の処理水についての報道を行うなど、日本以外の事例も報道することで、海洋放出を正当化するような雰囲気を感じ取られました。またSNSでは、日本の海洋放出に反対する中国を批判する声が多く見受けられました。それをさらにニュースで取り上げることによって、マスメディアが日

本を批判する中国が悪であると印象付けるような報道の仕方だったと個人的には感じています。しかし、中国や他国の処理水と違って、福島原発の処理水は核に直接触れたものであり、第一次汚染水なのです。よって、他国の処理水はあくまでも第二次汚染水になってくるので、環境への影響があるにしろ、程度がかなり異なります。このような汚染水が海洋放出されるに伴い、首相が地元市民への十分な説明を行い、理解を得られたと表明していましたが、地元市民の方は賛同していなかったそうです。ニュースで報道される内容と、福島で地元の方から聞くお話は大体どれもすれ違っており、情報統制されているのだなと強く感じました、私たちの知る権利が守られていないことに憤りを感じました。ここまで書いてきたことを含め、このような現状を見る限り、国は福島県民の安全を蔑ろにしており、自国の利益のことしか考えられていないのではないのでしょうか。震災から10年以上経った今、進まない本当の復興をもう一度問い直す必要があります。第一に考慮すべきは被災者であり、安全や人権を保障する義務が国にはあるはずです。目に見えない放射能、そして直ちに影響が出るわけではないとしても、こ

れから更に時間が経てば、現在の杜撰な対応のツケが回ってくると思っています。起こった後では遅いのに、政府はこのまま先行きが見通せない、不透明な復興を続けていくのでしょうか。そうならないためにも、私たちは被災者の声を届ける必要があります。宮原（2006）によれば、『「復興」とは「災害によって衰えた被災者および被災地が再生すること」である。』と示している。今の福島への復興は果たして再生しているということができないのでしょうか。目先の利益にとらわれず、長期的に支援を続けていく、それが本来復興のあるべき姿であり、被災者の安全を保障していくべきです。現場に行かなければわからない福島の現状を、私長期的な視野で伝えていきたいと思っています。

#### 参考文献

“東電向け国の支援7兆円突破 震災3年、賠償・除染なお課題”・日本経済新聞・2014-03-10.  
2045年にどこへ？原発事故で発生した汚染土 福島・中間貯蔵施設の現在地”・東京新聞・2023-05-21.  
宮原浩二郎 「復興」とは何か ―― 再生型災害復興と成熟社会 2006.先端社会研究 第5号

□福島訪問、半年前との比較

古賀 伊織 大学3年

私は今年の春に初めて福島県の被災地を訪問し、今回が2回目の訪問となりました。前回の訪問時と比較していくつか変わった点もあれば、変化していない点もあります。今回の記事はそのことについてを主にまとめました。

#### 〈双葉町〉

今もお帰還困難区域が大半を占める双葉町は、元福島第一原発の近くということもあり、放射線量は高いです。前回訪れた伝承館は休館日だったため見学できませんでした。この近くには福島県復興祈念公園という広大な公園が途中まで整備されていますが、3月に訪問した際と全く変わらず更地のままでした。完成にはほど遠いと思われます。一方で前回も訪れた双葉駅周辺には「えきにし住宅」という、2022年に入居者を受け入れ始めた公営住宅があり、現在は30人弱が生活しています。訪れた際は大雨だったため、歩いている人は見かけませんでした。入居者が育てていると思われる植物が家の前にあり、人の気配を感じました。また、

今年の8月には双葉町に震災後初のコンビニがオープンした他、飲食、温浴、宿泊の機能を備えた施設もオープンしており、復興に向け少しずつ進んでいると感じました。

#### 〈富岡町〉

今年の春に桜並木で有名な夜ノ森が特定復興再生拠点区域の避難指示解除となったため、前回の訪問時は立ち入り禁止でしたが、今回は立ち入り出来るようになっていました。解除された際はセレモニーが行われ、桜並木を一目見ようと多くの人が訪れました。訪問時の空間線量は0.27マイクロシーベルト/時でした。また、周囲には震災当時のままの住宅が多く取り残されていました。

#### 〈大熊町〉

道路を車で走っていると、所々に立ち入りを規制するバリケードがありました。放射線量はかなり高く、前回の訪問時も見た震災当時のままの寿司屋、服屋がまだ残っていました。このあたりは手がつけれない、という事情があるかもしれませんが、私には放置されているように感じます。大野駅周辺は再開発が進められており、震災前は商店街だった駅前には、現在建物

が全て取り壊されており更地となっています。震災前の賑わっていたこの場所を写真で見ましたが、やるせない気持ちになり、改めて原発事故の脅威を思い知りました。現在、ここは復興に向けて、特に帰還者に向けたアパートが立ち並ぶ市街地を整備しています。



大野駅2階の窓から見た元商店街。建物は全て取り壊されていて、震災前の面影は無い。原発事故は人々から恋しい故郷さえも奪った

### 〈浪江町〉

避難指示が解除されたことで、前回立ち入り出来なかった場所に訪れることが出来ました。

「陶芸の杜おおぼり」はその一つで、今年13年ぶりに大せとまつりが開催された。周囲はまだ震災後のままの崩壊した家屋や建物が多くあ

りました。空間線量はかなり高く、2マイクロシーベルト/時を常時越えていました。(福岡の空間線量は平均0.1マイクロシーベルト/時以下。)そのため私たち大学生は身体に影響が無いよう、車の中で待機しました。

陶芸の杜とは別に、ソーラーパネルが広大な敷地に詰められた太陽光発電所を訪れました。パネルの設置場所は帰還困難区域とそうでない場所であり、場所によっては道を挟んでそこが区別されていました。周囲は雑草が生い茂っており、その雑草を刈らず除草剤を散布しています。そのため除草剤による空間汚染が広がっているのではないかと懸念を抱きました。

ここでつくられた電気は福島県内でなく東京に送られます。また、広大な土地に敷き詰められているソーラーパネルですが、いつかは寿命がきます。その時この場所はどうか、この先この管理は行われるのか、等の不安は拭えません。この構造に見覚えはありませんか？震災前の原子力発電の頃の構造ととてもよく似ているように思えます。つまり、震災後から全く変わっていないのです。変わったのはエネルギーだけで、これでは復興しているとはとても言えません。

### 〈飯館村〉

長泥地区の避難指示が今年の春に解除されたため、前回バリケードで封鎖されていた特定復興再生拠点区域に立ち入り出来るようになりました。



通行止めされていた時の写真。(今年の3月訪問時)警備員がいて厳重に管理されていた。



右の写真と同じ場所で今回撮った写真。バリケードがないため通行は自由となっている。

この場所の空間線量を測ったところ、1.7マイクロシーベルト/時でした。この数値は前

回の訪問時とあまり変わらず、場所によっては私たち大学生が車から降りられないほど線量が高い場所もありました。なぜこの場所の避難指示が解除されたのかと疑問に思うと同時に、数年間の封鎖は果たして意味があったのかとさえも思えました。長泥地区には今年の5月に新しくコミュニティセンターが完成しており、総工費は200億円を越えています。200億円もかける意味があったのかは分かりませんが、いずれにせよこの場所に若い世代が定住できるとは思えません。コミュニティセンターのすぐ横には隠されるようにまとめられた除染土が積み上がっていました。これは多額のお金で立派な建物が次々に建てられているが、根本的な解決になっていない、そのため復興が進まない福島県の現状そのものに思えました。

前回の訪問時から半年、福島は復興に向けた変化が多くありました。その変化が良いことばかりとは断言できませんが、震災前の生活には決して戻ることには無いでしょう。それほどまでに原発事故の残した傷跡はとて大きく、それ故に二度とこのようなことは決して起きてはならないのです。

福島訪問中に撮影した写真や報告会で使用したパワーポイント資料を団体ウェブサイト内にて公開しています。  
右のQRコードよりアクセスできますので、ぜひご覧ください。



ご支援・ご協力をありがとうございます！



読み終えた本やCDなどで募金ができる「古本募金きしゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いたします！

◀ これまでにお寄せいただいた寄付額 ▶

◆◆ **1,279,159**円(450名) ◆◆

- ◆2017年~2020年 810,147円 (290名)
- ◆2021年 292,268円 (80名)
- ◆2022年 135,740円 (44名)
- ◆2023年1月~10月 40,704円 (36名)

あなたのご自宅や職場に眠るお宝が

チェルノブイリ支援につながります



その他、懐かしのおもちゃ、プリキ玩具(昭和40年代以前のもの)、フィギュア、プラモデル、鉄道模型、洋酒、テレホンカード、商品券、切手、ハガキ、年賀状、カメラレンズ、模型、絵画、万年筆など…

## 夏だより チェルノブイリ医療支援ネットワークとの十年（後編）

ブレスト郊外の自然公園ビャウオヴィエイジャの森入り口

2017年9月に38回目の訪ベラ（自身3度目の通訳同行）が行われました。清水先生、木村先生、山田さん、河上さんに加えて今回は順天堂大学客員教授の千葉百子先生が参加しました。前夜遅くミンスクに到着した一行と翌日ブレストに列車で移動、いつものようにアルツールさんとヴァロージヤさんが出迎えてくれました。次の日から提携医療機関の訪問が続きます。内分泌診療所では、アルツール院長達と市内・国内の甲状腺疾患の検診や発症状況に関する情報・意見交換が行われました。貴重なデータを惜しげもなく提供してくれるのは、長年築き上げてきた固い信頼関係の証です。今回は甲状腺内視鏡手術実施はありませんでしたが、医療問題をテーマに実りあるディスカッションとなりました。

次にブレスト州立悪性腫瘍病院を視察訪問しました。リニューアルした病院内を案内してくれる時に通訳を任せましたが、拝見する様々な検査器具類の詳細説明には専門医療用語を熟知する山田さんのサポート訳がやはり必要でした。つづいて院内の講堂でシンポジウムが開催され、清水先生と木村先生の講演が行われました。聴講した若い医師達から山のような質問が

先生達に浴びせられ、私と交代ごうたいで応対していきました。清水先生のこれまでの実績と活躍（甲状腺内視鏡手術導入・現地指導）と木村先生の研究対象（福島原発事故後の小児甲状腺検査）への関心の高さが分かります。特に大事な場面（学会発表や診察・治療・手術時）での通訳業の後、山田さんは決まって深い眠りにつきます。手術をやり終えた直後の清水先生も同様ですが、間違いの許されないシチュエーションで持てる力を出し切った反動だと思えます。全集中して自分の責任を果たすその姿は、憧れであり目標です。

ミンスクに戻ると、大使館と赤十字社を表敬訪問して活動報告をした後、医学再教育アカデミーでのシンポジウムに出席しました。この内分泌科部長でラリッサ・ダニーロヴァ医学博士が出迎え・案内してくれました。以前、日本



医学再教育アカデミーにて  
（写真中央の女性がラリッサさん、その左横に清水先生、河上さん、千葉先生、木村先生、山田さん）

での医学研修時代に山田さんに大変お世話になったという彼女は、その時の恩をずっと忘れずいつでも私達の訪問を大歓迎してくれます。

この時のシンポジウムでは、清水先生、木村先生、千葉先生が講演しました。その内、清水先生と千葉先生の発表を通訳することになりました。こういった舞台（学会）で通訳者として演説者とともに壇上にあがり、大勢の人前で話すのはこの時が初めてでした。先生方と事前打ち合わせをしたおかげで、思ったより緊張せずスムーズに出演することができてホッとしました。専門的な話だけでなく時おり品のあるユーモアを交えながら場の雰囲気を和ませていく清水先生からは「ほどよい緊張感を持つことが成功につながるんだよ！」とアドバイスをもらいました。とても大事なことを教わった通訳実践経験となりました。

2018年9月の訪ベラ・メンバーは木村先生、山田さん、河上さんと川原秀之事務局長です。今回の主な活動目的は、ブレスト内分分泌療所のヴァロージヤ医師の移動検診チームに同行してストーリーリン地区を訪れ、地元の外來診療所で行われる甲状腺検診を取材することでした。この移動検診チームはブレスト州の各地区

を一週間ごとにまわり（毎週月曜日のみ内分分泌療所に結果報告に戻ります）、地元住民を診察してチェルブイリ事故後の放射能被害による甲状腺疾患の早期発見・治療に務めるものです。必要であれば穿刺吸引等も施します。

ブレスト市内の内分分泌診療所から、移動検診先ストーリーリン地区の外來診療所に向け出発。道中、検診車で移動するヴァロージヤさんと検査機器などが積んである車体の後方に乗ってみましたが、検診チームのスタッフさんがいつも座る席ですが、車の移動中かなりの揺れでじっと座っていられず少し危険に感じました。新たな移動検診車購入の必要性について身をもって分からせてもらいました

ストーリーリンでは我々は近くのホテルにチェックインしましたが、ヴァロージヤさん達は検診をする外來診療所に泊まりこみです。その間、朝から晩までできるだけ多くの住民をひたすら丁寧に診ていくヴァロージヤ医師達。私達は、その様子を取材させてもらいながら検診を受けに来た村の人達にインタビューします。異常が見つからず家に帰っていく人達の安堵した表情が印象的でした。滞在中、ストーリーリン地区中央

病院で木村先生による「医療保険システム」報告、山田医療顧問の「広島・長崎の被爆」講演も開催されました。今後この地区での医療提携発展の可能性にもつながる講義となりました。

首都ミンスクでは関係機関訪問、現地調査も行いました。その合間に町を案内してくれたのが、当時13歳だった現地の友人チホン君です。とても人懐っこい彼のお母さんはチェルノブイリ近郊生まれで、事故のことをよく聞かされてきたそうです。そのこともあってか、訪ベラ・メンバーの滞在中には様々な面で私達を積極的にサポートしてくれました。子供の視点で見る環境問題や学校教育制度、他にも様々な話題での率直な意見をきけたのは有意義でした。このように、地元住人との距離がどんどん縮まり、お互いにオープンになっていく付き合いも大事だと思いました。



町を案内する等よく手伝ってくれたチホン君（写真右）とお母さん（左隣）とそのすぐ左が妹のアンゲリーナちゃん

2019年9月に参加させてもらった訪ベラ（メンバーは木村先生、川原さん、理事の和田幸策さん、監事の三島さんとこさん）では、二週間ちよつとの間にミンスク・ブレスト・ピンスク、ゴメリと多くの都市をまわりました。

ミンスクでは私の通う国立大学ジャーナリズム学部の図書館でスタッフの方々に手伝ってもらいながら国内のエネルギー情報等を調べたり、前回の訪ベラ時も協力してくれたチホン君と妹のアンゲリーナちゃん（当時12歳）も合流して町の散策に出かけたりしました。この子供達と知り合った日本ニコライ堂にも顔を出すと、彼らと同世代の多くの子供とその親御さんと触れ合う機会に恵まれました。今回のように、資料集めを手伝ってくれた司書の方々や教会の子



資料集めを手伝ってくれた司書の方々と（写真左から川原さん、三島さん、右端は和田さん）



リュドミーラさんのお宅を訪問



内分泌診療所で新しい雪だるま号購入における車種選びの時の真剣な議論の様子

達、CMN訪問団の皆さんとすぐに仲良くなっていく現地の人々との交流の輪が様々な分野で広がっていくのは嬉しい限りです。また、ミンスク郊外に住む心理カウンセラーのリュドミーラさんと14歳になった娘アンナちゃんのお宅に伺いました。郊外にある立派な庭付きの一軒屋に大家族で住んでいます。2021年来日講演予定だった彼女たちは日本人達のために何かできることがあれば嬉しいと、訪日を心待ちにしている様子でした。

ブレストでは内分泌診療所でアルツール院長達と、新たに購入する移動検診車のことで念入りな打ち合わせを行いました。私も契約書の作成（翻訳作業）には特に時間をかけました。ちよつとした間違い（数字の書き方の違い等）

でも受理されない場合があるので、少しでも気になるところは双方に何度も確認しました。そして、無事お互いの署名捺印がなされ、正式に契約成立となりました。CMNに寄付をしていただいている方々のご支援が実りました。「本当にありがとうございます！」と心から喜ばれていました。

ブレスト滞在中には、アルツールさんとヴァロージャさんがステディター視察も兼ねて、郊外にあるヘビャウオヴィエイジャの森に連れて行ってくれました。世界遺産にも登録されているこの自然公園内には、国のシンボルにもなっているズーブリ（バッファローの一種）をはじめ多種多様の動植物に会えて、博物館、サウナ、サイクリングコースなどのレジャーも充実しています。そして、ブレスト市街中心部では、私達がこの町を訪れる度に見たくなる伝統行事が毎日行われています。日暮れの時刻になると、どこからともなくランプライターがやって来て外灯に明かりをつけていく光景です。

今回のブレスト内分泌診療所の移動検診同行ではピンスクという町を訪れました。検診チームはロギーシン市立病院・ピンスク中央診療所

分室《市立第一診療所》で3日間に200人近くの地元の診療希望者を診ました。過去に甲状腺手術を受けたことのある患者さんへのインタビューもできました。ピンスクには清水先生の手術を受けたアリョーシャさんも住んでおり、彼女のお宅へも挨拶に行かせてもらいました。清水先生へのビデオメッセージもいただき、とても会いたがってる様子でした。

ミンスクに戻り10番病院でラリツサさん達と専門的な情報・意見交換をした後、ゴメリ市へと向かいました。ゴメリで活動するのぞみ21工房の取材と商品購入のためです。これは原発事故の被害者や障害者が働く福祉工房で、ちょうどこの時CMNとの友好20周年を迎えていま



(上) 国のシンボリックな動物ズーブリ

(下) プレストの中心通りで毎晩ランプライターが外灯に明かりをつけていく伝統



した。それを記念してスタッフの皆さんが集まって昼食会を催してくれました。スタッフのご家族や小さなお子さん達も来ていて、訪問団に日本の文化や教育のことをたくさん質問するなどして交流を深めるすばらしい機会となりました。今までお世話になってきた方々との親交をさらに深め、また多くの新しい出会いと発見のあつた実り多き旅となりました。

2020年〜2023年はパンデミックの影響もあり、訪ベラが行われていません。その間も文化紹介を中心としたテーマで情報発信を続けています。2015年9月のチエルノブイリ通信を最初に、現在は《ミンスクの日》連載コラムを投稿しています。今は現地の子供達に



(上) 移動検診先のピンスクでの穿刺吸引細胞診

(下) ピンスク市にお住いのアリョーシャさん宅を訪問



日本文化（語学や伝統的な遊び）を伝える活動にも携われることになり、幸せのエネルギーを日々もらっています。そんな元気が出る記事をこれからもたくさん書いていきたいです。

チエルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）との十年はとても貴重な体験とあたたかい思い出が詰まった時間で、いろいろな魅力的な人との出会い、別れ、再会が心に残っています。次回の訪ベラが実現するまでには、またさらにその交流の輪が広がっていることでしょう。この医療支援活動のますますの発展を期待しています。

\*紙面の都合上、内容を一部割愛して掲載しています。全文は団体ウェブサイトよりご覧ください。

田中仁（たなかひとし）



ベラルーシ国立大学在学中から、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の新聞や雑誌で活躍中。ミンスク在住。

# チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶購入キャンペーン

2023年12月末までにチェルノブイリ支援コーヒー・紅茶を合計で8,000円以上お買い上げいただいた方へ、2024年度版の福島訪問カレンダーをプレゼントいたします。

ご購入いただいた収益は、甲状腺の検診に必要な消耗品の購入資金に充てる予定です。

右のQRコードよりコーヒー・紅茶の詳細ページへアクセスできます。



\*年内にお届けをご希望の場合は12月中旬ごろまでにご注文いただけますと確実です。

カレンダー（イメージ）



コーヒー・紅茶はすべてフェアトレードによるものです。  
商品の購入は、無農薬・有機栽培に取り組んでいる現地の生産者の健全な生活を支えることにも繋がります。

## スタッフのおすすめ



### まいるとぶれんどリップバックコーヒー

個包装になっているので保存も簡単。お手軽に美味しいコーヒーをお楽しみいただけます！



またプレゼント用としてもおすすめです。私の家族にもおいしいと好評でした。

### アールグレイ紅茶

香りがとてもよく、リラクゼーションしたいときにぴったりです。



ストレートはもちろんのこと、暑い時期はアイスで飲むのもおすすめです。

## ◇ お知らせ ◇ 2024年度通常総会を開催します

2023年度の事業報告や決算報告等について議決をおこなう年次総会を開催します。総会の議決権を有する正会員でない方もオブザーバーとしてご参加いただけます。お気軽に事務局までお問い合わせください。

日時 2024年2月17日（土） 16:00～17:00 \*予定

会場 チェルノブイリ医療支援ネットワーク事務所

（福岡市博多区博多駅東2-5-11 コスギビル5F）

\*書面や電子メール等での評決を中心とした開催方式を採用します。  
事業報告・決算報告資料は総会后にウェブサイトにて公開予定です。

# たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計 635,075円

*活動支援金	332,575円
*のぞみ21カンパ	5,000円
*雪だるま3号カンパ	7,000円
*東日本支援カンパ	53,500円
*おまかせカンパ	30,500円
*福島訪問カレンダー	53,000円
*福島訪問の交通費一部	6,000円
*福島県産米10キロ	115,000円
*あじさいの会	33,000円

(2023年8月～2023年10月分の寄付内訳)

## ●口座受付寄付

石川睦枝 枝光淳子 榎本みつ枝 緒方靖子 門脇邦子 金山涼子 白水明代 高嶋幸雄立石まこと 種和子 珍部千鳥 佃あけみ 徳永明子 長棟かおる 野中孝子 野村文子 古本募金きしゃぼん(運営:嵯峨野株式会社) 増田朋子 村上和代 村下範子 吉次康子

## 編集後記

今回よりホームページではpdf版に加えて、スマホでも読みやすいオンライン版のチエルノブイリ通信の公開を始めました。ぜひこちらもちェックしてみてください！(K.T.)

## 「都道府県別」

【山形県】 1名	【東京都】 1名	【栃木県】 1名
【長野県】 1名	【愛知県】 1名	【鳥取県】 4名
【島根県】 5名	【広島県】 5名	【山口県】 4名
【福岡県】 21名	【佐賀県】 3名	【長崎県】 2名
【熊本県】 5名	【大分県】 1名	【宮崎県】 2名
【鹿児島県】 3名		

計61名(匿名含む)

## ●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐々野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計108名(匿名含む)

## 皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●ああ、これどころおきなく口にはできる。深謝。  
●遅くなつてしまい申し訳ありません。

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チエルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあってさせていただきます。

※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

## お願い

# 住所

を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが、事務局までその旨ご連絡ください。

## クレジットカード決済

## シンカブルのご案内

クレジットカードで寄付ができる“Syncable(シンカブル)”を導入しています。団体ウェブサイトや左のQRコードからアクセスが可能です。

\*コピー等のお支払にもご利用いただけます。

Syncable

